

三願転入

ノート

山上正尊案

20250224 真宗学寮オンライン会議

20250724 勧学寮論義会

昭和五十六年度 安居 三願転入 1

令和七年 勧学寮論義会 三願転入 決議 2

出拠

釈名

三願 6

転入 6

義相

① 三願の見方 9

願文と宗祖の見方 9

法然聖人の三願観 10

② 三願を誓われた仏意 12

仮あり真あり 12

第十九願 12

第二十願 12

③ 三願転入釋の文の解釈 14

④ 宗祖における三願転入の事実の有無 18

三願転入は本人の経験である 18

二十九歳に直入した説 18

四十二歳 信心がゆらいでいた説 18

⑤ 三願転入釋の所願 19

昭和三十六年度 安居 三願転入

綜 理…大江 淳誠 勸学

本講師…小笠原 宣秀 勸学 講題…『法事讃』

典 議…普賢 晃壽 司教

昭和五十六年 提要

(一) 三願転入

〔出拠〕

〔化卷〕(三十一丁)

〔論点〕

(一) 〔化卷〕三願転入の文の解釈

(二) 宗祖の三願転入の実否

(イ) 宗祖の転入の時期

(ロ) 直入か転入か

(三) 三願転入の今日的意義

判決

一、 出拠

「化身土文類」三十一丁に

「是以愚禿釋鸞、仰論主解義、依宗師勸化云云」

等とのたもう御文である。

一、 義相

宗祖は本典の真実五巻において、第十八願弘願真実の義を開顕され、更に化身土文類においては、第十九願要門と第二十願真門の教義をあきらかにし、真仮の分別を明確にされている。このような説示をふまへて、宗祖が自力の仮門より、弘願他力の真実に帰せられるにいたったよろこびを述べられたのが、この三願転入の釈である。

第十九願とは、修諸功德の善、諸善万行により、雙樹林下往生を得ることを誓った願である。第二十願とは植諸徳本、即ち善本徳本の自力念仏により難思往生を得ることを誓った願である。第十八願とは三心即一の信樂を涅槃の真因として、難思議往生を得ることを誓った願である。この中第十九・第二十願は仮の願である。

しかし宗祖は第十九願については化身土文類三経隠顕釈において「方便の願を按ずるに、仮あり真あり」といわれている。第十九願は権仮方便の萬行諸善がとかれてあるが、その仏意は從仮入真のためである。願文の表面は仮の方便のおしえがとかれ、願底の誓意は真実に帰せしめんという仏意がはたらいっているというべきである。方便により真実に導入せしめんとする仏意が第十九願に含まれているのである。また第二十願についても「いま方便真門の誓願について、中略、また真実あり、方便あり」といわれている。所行法体の名号は真実であるが、これを修する機については方便を帯びるもので、所謂法頓機漸の義を示されたものである。機漸よれば真実の名号法は方便に墮するが、法頓よりせば方便の機を誘引する誓意がある。仏が第

二十願をもうけて攝化する辺につけば、真実の名号により方便の機を真実弘願に帰せしめんとする仏意が存するのである。三願転入の釈に、宗祖は、「果遂の誓 まことに由ある哉」といわれている。第二十願は自力念仏の者を弘願他力の真実に帰入せしめんための方便誘引の願であることを説示されたものである。かくて第十九・第二十願の誓意は、方便誘引して、弘願真実に帰入せしむるにあるといふべきである。

宗祖が弘願真実のおしえを、あおぐ身になられた上で、過去の入信の歷程をふりかえられた時、すべては第十八願の真実に導入せしめんとする方便のはからいに外ならない。第十九願要門、第二十願真門を経て真実弘願に転入した入信の歷程を回顧することにより、自分をはぐくみたもうた如来大悲の仏恩をあおぐと共に、三願真仮、要真弘廃止の意味をあきらかにされたのが、三願転入の釈であると窺うのである。

宗祖が要門、真門をへて「選択の願海に転入せり」といわれている思召は、要門、真門の自力を廃捨して、弘願他力に帰する廃立の思召を表明されたものである。

上述の如く、本典は前五巻において真実をのべ、第六巻において、第十九・第二十願の方便の教義がのべられている。所謂簡非を示す。いま問題にしている三願転入の釈は、直接的には、化身土文類の方便両願、要真二門の説示がおはって、その結びにあたるところであり、遠くは真実の前五巻をうけ、真実と方便の教義の関係を三願真仮の上で明示される部分である。方便両願の教義、要門真門は仮としてこれを廃し、第十八願の弘願こそが他力真宗である旨を明示されたのが、三願転入の釈である。要門真門をへて、弘願に転入せられた宗祖のよろこびを縁として、三願の真仮をあきらかにせられたのが、三願転入の表白であると窺うのである。

かかる三願転入の教示は、今日の我々にとって、如何なる意味をもつものであろうか。宗祖において、浄土真宗が開創され、第十八願の真実義が開顕されている今日、我々は必ずしも三願の過程を経過するものではない。機類萬差であり、直ちに弘願に入るものもあれば、しからざる者もある。直入の者もあれば、漸入の者も存するといふべきである。

三願転入の釈を通じて、我々は、如来の本願他力のはからい、御恩を仰ぐと共に、三願真仮の思召を頂戴すべきである。

令和七年 勸学寮論義会 三願転入 決議

【題意】

宗祖は『本典』『化身土文類』に、自身が弘願の法門に至り得た事実を省みられて、三願転入と呼ばれる釈を示された。この三願転入について、宗祖の体験の事実とするか、法義内容を示された義説とするか、古来より議論が重ねられてきた。また三願転入が宗祖の入信の事実とすれば、どの時期を三願に配当するのかなどの問題も議論されてきた。

さらには『恵信尼消息』に記された、三部経千部読誦の省察と三願転入の記述との整合性について、論点となっている。これらの問題点を考察し、宗祖の三願転入の意趣をあきらかにする。

【出拠】

『本典』『化身土文類』三願転入の釈（※原漢文に返り点）

【68】 ここをもつて愚禿釈の鸞、論主の解義を仰ぎ、宗師の勸化によりて、久しく万行諸善の仮門を出でて、永く双樹林下の往生を離る。善本徳本の真門に回入して、ひとへに難思往生の心を発しき。しかるに、いまことに方便の真門を出でて、選択の願海に転入せり。すみやかに難思往生の心を離れて、難思議往生を遂げんと欲す。果遂の誓（第二十願）、まことに由あるかな。ここに久しく願海に入りて、深く仏恩を知れり。至徳を報謝せんがために、真宗の簡要を撫うて、恒常に不可思議の徳海を称念す。いよいよこれを喜愛し、ことにこれを頂戴するなり。

（『聖典全書』二・二一

〇）

『同』『化身上文類』『後序』（※原漢文に返り点）

【118】 しかるに愚禿釈の鸞、建仁辛酉の暦、雑行を棄てて本願に帰す。

（『聖典全書』二・二五

四）

『恵信尼消息』『五』

ぜんしんの御房、くわんぎ三年四月十四日むまの時ばかりより、かぎ心ちすこしおぼえて、そのゆふさよりふして、大事におはしますに、（中略）

人のしうしん、じりきのしんは、よくよくしりよあるべしとおもひなしてのちは、きやうよむことはとどまりぬ。（中略）

三ぶきやう、げにげにしく千ぶよまんと候し事は、しんれんばうの四のとし、むさしのくにやらん、かんづけのくにやらん、さぬきと申ところにて、よみはじめて、四五日ばかりありて、思かへして、よませ給はで、ひたちへはおはしまして候しなり。

しんれんばうはひつじのとし三月三日のひるむまれて候しかば、ことしは五十三やらんとぞおぼえ候。

（『聖典全書』二・一〇三五～一〇三七）

【釈名】

「三願」とは、「大経」の第十八願・第十九願・第二十願を指す。宗祖は第十八願を弘順他力真実の法門、第十九願を諸行往生が誓われた要門、第二十願を自力念仏往生が誓われた真門と領解されて、三願に真仮を分判された。「転」は回転、転位、転化などと熟字し、「まわる」「ころがる」「うつる」などの意味である。「入」は「出」に対して「はいる」を意味する。

合釈すると、「三願転入」とは、宗祖が弘願の法門に帰入された事実を振り返られて、第十九願の要門から第二十願の真門へ回入し、さらに第十八願の弘願の法門へ転入せしめられたと感佩されたものである。そしてそこに、自力方便から他力真実へ従仮入真せしめてくださった甚深の仏恩を慶ばれたことが知られる。

【義相】

一、宗祖の三願観

宗祖は『本典』において、第十八願・第十九願・第二十願の三願を生因願と見られて、第十八願を「念仏往生の願」「選択本願」「至心信樂の願」等と名づけて他力真実の願とされた。対して第十九願は「修諸功德の願」「臨終現前の願」「至心発願の願」等と名づけて諸行往生を勧

める願と見られ、第二十願は「植諸徳本の願」「不果遂者の願」「至心回向の願」等と名づけて自力念仏をもって往生を願求する権仮方便の願とされた。

特に『本典』における「選択本願」の願名は、第十八願他力真実に限って用いられるのが宗祖の特色である。また「信文類」に標せられた「至心信樂の願」の願名は、「化身土文類」の「至心発願の願」「至心回向の願」の願名に対応している。その信樂の名義は、「疑蓋間雜無きがゆゑに、これを信樂と名づく」といわれたように、捨自歸他の信心をあらわし、如来選択の願心に応じた信心であることがうかがえる。

それに対して第十九願・要門は「発菩提心 修諸功德」と誓われた聖道の行を「至心発願」の信心をもって往生を求め、第二十願・真門は「聞我名号 係念我国 植諸徳本」と誓われた念仏を善本、徳本として「至心回向」の自力の信心をもって往生を願求する権仮の法門であるという意味づけられ、いずれも化土の因であることを確定された。

二、三願転入釈の文意

まず宗祖は、三願転入が「論主の解義を仰ぎ、宗師の勸化によりて」実現したと述べておられる。このことは天親菩薩の『浄土論』の一心願生の義意と、それを承けられた曇鸞大師の釈意、及び善導大師の要弘二門、三往生義などの釈意を承けられたとうかがわれる。そのなか要門・諸行から真門・念仏へは「回入」、真門から弘願へは「転入」と語を変えて述べられている。これは諸行から念仏専修へは行体が変わるので、教えることにより、めぐり変えることができることをあらわされたとうかがえる。真門から弘願へは、行体が共に念仏であるが、第二十願の行者には自力の執われが残っている。それを知らせるために、転換を意味する「転」の字を用いて、「転入」の語であらわされたと考えられる。

三、三願転入の事実の有無

三願転入が宗祖自身の事実であることは、「ここをもって愚禿釈の鸞」と述べておられることによって明らかである。浄土真宗が捨自歸他をもって回心をあらわす点より考えると、この三願転入は、すべての人が経験しなければならないといえる。しかしながら、その経過における緩急の相違は、人によってさまざまな状況があると考えられる。

また、宗祖自身については、『本典』『後序』に「しかるに愚禿釈の鸞、建仁辛酉の暦、雑行を棄てて本願に帰す」と述べられていることから、二十九歳の法然聖人への入室の時点で捨自歸他の回心が遂げられていたことが明らかである。しかし、三願転入という論理をもって弘願に至るという教義体系は、『本典』に見られる三願真仮、三経真仮という調機誘引、従仮入真の願意に対する領解が確立した上のことと考えられる。

従来、宗祖自身の三願転入の時期については、比叡山時代か、吉水入室時か、在京の時代かなど、宗祖の生涯での特定の時期に配当せんとする試みが重ねられてきたが、史料的な制限から難しいといわねばならない。

また『恵信尼消息』の寛喜三年、建保二年の經典読誦に関して、宗祖の弘願他力の回心は、この時点まで成立していなかったのではないかとの理解もある。しかし、宗祖の回心は、法然聖人の元へ入室された建仁元年の時点で確立されていたといわねばならない。それは宗祖自身の「建仁辛酉の暦、雑行を棄てて本願に帰す」という言葉に明確にあらわされている。

また三部経千部読誦の問題も、「人のしうしん、じりきのしんは、よくよくしりよあるべし

とおもひなしてのちは、きやうよむことはとゞまりぬ」と記されているように、他力の信心が確立しておればこそ、反ってその誤りに気づき、呪術的救済法にたよううとした自身に対して、深く慚愧されたと見るべきである。

四、三願転入釈の所顯

三願転入の文は、宗祖自身の回心に基つき、仏祖の教導の感恩を感佩された文章である。要・真二門の経過を挙げることにより、深く自力に執っていた身を「久しく」「永く」調育、教導してくださった仏恩、師恩によって、今、選択の願海に帰入することのできたことを、「ここに久しく願海に入りて、深く仏恩を知れり」と慶ばれたのである。

出拠

『本典』「化巻」

釈名

三願

- ・三つの願
- ・生因三願（衆生が浄土往生する因願）

転入

転（轉）（字義）

- ① まわる ぐるっとまわって元へ還る ひとまわりする （還・廻・施）
② うつる かわる

㊦うつる 遷

㊧おちこむ はまる 入

㊨居処がうつる

㊩うごく

㊪うつって行く 行 動

㊫かはる 変易

㊬ひるがえる

回（字義）

- ①めぐる

回転 まはる。

流旋也 うづをまく

繞也曲也 まがりくねる

回変 めぐりかはる

眩惑也 くらみまどふ

- ②めぐらす③めぐり④まらい⑤たび⑥まがるまげる⑦たがふ違也⑧よこしまなど

回紆 めぐりまがる。廻迂。迂回。

回心 心を改める。改心。

回転 めぐる。めぐらす。

入（字義）

- ①いる。いれる。

㊭はいる。いれる。内也。「上と下従り」の象形。外より中

㊮くる。こさせる。来

- | | |
|-------------|-----|
| ハ あづかる。まじる。 | |
| ニ おちる。おとす。 | 墮 |
| ホ せめ下す。 | |
| ヘ あたる。 | |
| ト かへる。かへす。 | |
| チ つかへる | |
| リ つらぬく。 | 透る。 |
| ヌ 死ぬ | |
| ル 流れ込む | 受 |
| ヲ うける | |
| ワ 身投げする | |
| カ あてる。充当 | |
| ヨ やる。嫁にやる | |
| タ ひたす。しほ。 | 没入 |

【転入】の語例

『顕浄土真実教行証文類』

169- 15 (『般舟讃』)

微塵の故【転入の語例】業【転入の語例】と随【転入の語例】智と滅す。覚へざるに真如の門に転入す。

323- 4 (『論註』)

〈この清浄に二種あり、知るべし〉といへり。上の転入句のなか
に、一法に通じて清浄に入る、清浄に通じて法身に入る。

『浄土和讃』66首

(『聖典全書』二卷370頁)

- | | |
|-------------|-------|
| a 真如の門に転入する | ウツリイル |
| b 真如の門に転入する | ウツリイル |
| c 真如の門に廻入する | メグリイル |
- (一乗の機にイル也。法性真如の門かどにウツリイルなり)

【回入】の語例(宗祖)

『顕浄土真実教行証文類』

203- 15

凡聖・逆謗齊しく回入すれば、衆水海に入りて一味なるがごとし。

『尊号真像銘文』(広本)

672- 9

「凡聖逆謗齊回入」といふは、小聖・凡夫・五逆・謗法・無戒・闡提、みな回心して
真実信心

『浄土文類聚鈔』

488- 14

得失を専雑に決判して、念仏の真実門に回入せしむ。

『愚禿鈔』

535- 11

起して生死に回入して衆生を教化するを、また回向と名づくるなり」となり。

『高僧和讃』

584- b7

すなはち諸有に回入して

普賢の徳を修するなり

『正像末和讃』

609- a4

還相回向に回入せり

他 『論註』 引文に多数

227- 6' 242- 11' 243- 8' 313- 7' 313- 11' 334- 7

転と回 同義

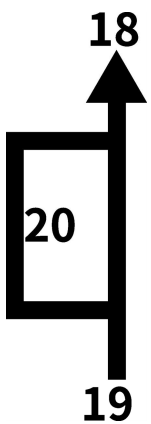
字義 回転という。

聖教量 『高僧和讃』(66首)に同じ内容を「転入」ともいい「廻入」ともいう。

転と回 別義

回入 メグリイル

要↓真 迂回の意。直入せず他を経由する。遠回りする。



めぐりかわるのは 行(諸行から称名)。信は自力心で変わらない。

転入 ウツリイル

遷り変わるの信(自力心から他力回向の信へ)

義相

① 三願の見方

願文と宗祖の見方

共通点

「十方衆生」「至心〇〇欲生我國」

生因三願

衆生が往生する

本願文の特徴

・信行次第

信具の行。他は信行次第。行によって確立する信

・信樂

疑蓋無雜（自力まじえず）

・唯除

一切善惡大小凡愚。他は善人。

願文		宗祖のことば	
(二八)設我得佛、十方衆生、 信至心信樂、欲生我國、 行乃至十念。	益若不生者、 不取正覺。 唯除五逆誹謗正法。	行の願 信の願	〈偈前の文〉(59) 真実行の願 諸仏称名の願 真実信の願 至心信樂の願 これすなはち選択本願の行信なり。 一切善惡大小凡愚 難思議往生 報仏・報土。
		機 往生 仏土	斯れ乃ち誓願不可思議一実真如海なり。
		行 信 往生	〈觀經隱顯〉(195) 臨終現前の願 修諸功德の善 至心発願欲生の心 胎生辺地、双樹林下往生
(二〇)設我得佛、十方衆生、 行聞我名號、係念我國、植諸徳本 信至心廻向、欲生我國。 益不果遂者、 不取正覺。	行發菩提心、修諸功德、 信至心發願、欲生我國。 臨壽終時、假令不與 大衆圍繞現其人前者、 不取正覺。	願 行 信 往生	〈小經隱顯〉(199) 植諸徳本 1善本2徳本 至心廻向欲生の心 難思往生 仏者化身、土者疑城胎宮
		往生	
		願 行 信 往生	

法然聖人の三願観

(第十九願)

Q 法然聖人の第十九願の扱い如何。
A 三義有り。

①念仏者の摂取不捨の利益

②諸行往生

③引入

①念仏者の摂取不捨の利益

Q 来迎の分齊如何。

A 観経の「光明遍照十方世界 念仏衆生摂取不捨」の摂取不捨利益が臨終に顕現したものとみる。

Q 文証如何。

A 『和語灯録』三部経釈 観経(『聖典全書』6、403)

『三部経大意』観経(『聖典全書』3、1081)

に、大経の十二願、十八願、十七願、十三願、十九願を因・縁・益をもって証される。

Q 観経の文、大経の願、因縁益を配当せよ

A

縁「光明遍照十方世界」

光明 十二願 十方世界に遍く光明を照らして一切衆生に悉く縁を結ばしめんがため

寿命 十三願 よこさま横に一切衆生を広く摂取せむがため

因「念仏衆生」たてさま縦に十方世界をひさしく利益せむがため

名号 十八願 名号をもて因として衆生を引摂せむがため(784)

十七願 その名を往生の因としたまへることを一切衆生に普く聞かしめんがため

益「摂取不捨」

光明の縁と名号の因と和合せば、攝取不捨の益をかうぶらん事うたがふべからず

②諸行往生

『漢語灯録』大経釈(『聖典全書』6、315)(4、299)

上に来迎の願 (第十九願)

等 (第二十願)

の中及び次の

三輩の文(は) (第十九願成就)

助念往生 (第二十願の法門)

諸行往生 (第十九願の法門)

を明かす

(参考)

『和語灯録』大経釈(『聖典全書』6、402)(4、552)

『三部経釈』大経(4、783)

次に三輩往生の文あり。これは第十九願の臨終現前の願成就の文なり。

(三輩すべて「一向専念無量寿仏」念仏している。だから利益がある)

Q 選択集では三輩段はどの様に扱われるか

A 廃助傍の三義を出され、善導大師の義によつて廃の義を正義とする。

③ 引入

『西方指南抄』中 十八条法語¹⁴ (『聖典全書』3、933) (4. 133)

又云く、第十九の願は諸行之人を引入して念仏之願に歸せしむと也。

(第二十願)

Q 法然聖人の第二十願の扱い如何。

A 明確な釋はないが、わずかに三生果遂と見ておられた。

三生果遂

『西方指南抄』中 十八条法語¹⁴ (『聖典全書』3、930)

或人念佛之不審を、故聖人奉問曰、第二十願は大綱の願なり。「係念」(大經*卷上)といふは、三生の内にならず果遂すべし。假令通計するに、百年の内に往生すべき也「云云」。これ九品往生の義、意釋なり。極大遲者をもて三生に出ざるころ、かくのごとく釋せり。

今生 念仏しているが善根薄少

順次生 往生できない

順後生 には往生を果たし遂ぐ

② 三願を誓われた仏意

方便により真実に導入せしめんとする仏意

仮あり真あり

三経隠顕釈において「方便の願を按ずるに、仮あり真あり」(『聖典全書』2、195)

「仮あり」願文の表面 権仮方便の萬行諸善

「真あり」願底の誓意は真実に帰せしめん

小経隠顕(『聖典全書』2、198やこい)

「いま方便真門の誓願について、中略、また真実あり、方便あり」

「いま方便真門の誓願について、行あり信あり。また真実あり方便あり。」

「方便あり」

嫌貶 一切諸行少善

開示 善本徳本真門

励 自利一心

勸 難思往生

「真実あり」(小経隠顕2、199)

彰というは真実難信之法を彰す。

無碍の大信心海に帰せしめんと欲す^{おほ}

「果遂の誓 まことに由ある哉」(方便誘引の願)

第十九願

仮令・仮門

(失を示して所廢の法であることを教える)

欣慕

(從真垂仮。虚偽ではなく真実法を一分用いて調機誘引)

(『註釈版』396頁)

經家によりて師釈を披くに、

雜行のなかの雜行雜心・雜行專心・專行雜心あり。

また正行のなかの專修專心・專修雜心・雜修雜心は、

これみな辺地・胎宮・懈慢界の業因なり。

ゆゑに極樂に生ずといへども三宝を見たてまつらず。

仏心の光明、余の雜業の行者を照摂せざるなり。

仮令の誓願(第十九願)まことに由あるかな。

仮門の教、欣慕の釈、これいよいよあきらかなり。

第二十願

果遂の誓い

①化土往生を 果たし遂げる

②弘願へ 果たし遂げる

①②の意 真門釋。

②のみ 三願転入釋。

①②の意

真門釋（『註釈版』399頁）

行は專にして心は間雜す。ゆゑに雜心といふなり。定散の專心とは、罪福を信ずる心をもつて本願力を願求す、これを自力の專心と名づくるなり。善本とは如来の嘉名なり。この嘉名は万善円備せり、一切善法の本なり。ゆゑに善本といふなり。徳本とは如来の徳号なり。この徳号は一声称念するに、至徳成満し衆禍みな転ず、十方三世の徳号の本なり。ゆゑに徳本といふなり。しかればすなはち釈迦牟尼仏は、功德藏を開演して、十方濁世を勸化したまふ。阿弥陀如来はもと**果遂の誓**「この果遂の願とは二十願なり」を發して、諸有の群生海を悲引したまへり。すでにして悲願います。植諸徳本の願と名づく、また係念定生の願と名づく、また不果遂者の願と名づく、また至心回向の願と名づくべきなり。

②

三願転入（『註釈版』413頁）

しかるに、いまことに方便の真門を出でて、選択の願海に転入せり。すみやかに難思往生の心を離れて、難思議往生を遂げんと欲す。**果遂の誓**、まことに由あるかな。

③ 三願転入釋の文の解釈

二節 自喜を述べて結す

1項 所得の法を明かす

【68】 是をもつて	是 Q 「是をもつて」は何を承ける？ A 二説ある。 ① 要真二門は（大利を失する）方便である ② 真実五卷＋方便一卷 真実に帰すべしと本典を書いた②を取る。 Q 理由如何。 A 2 由あり。 ① 以下の所説が真仮にわたる。 ② 御開山が「頂戴すべ」きと表現されているから。 Q ①は認める。 ② 「頂戴」の語例如何。 A 他に2箇所しかない。 1 往還四法決釈151 往還の真実を頂戴している 2 一乗海釈59 真仮を頂戴している 「福智蔵（18）を円満し、方便蔵（19/20）を開顕せしむ。まことに奉持すべし、ことに頂戴すべきなり。」 自身の経験である。 親近感をこめた「空聖人」のように、御開山の内面により近いお心もちを吐露されたか。「愚禿釈の鸞」の語例は「後序」建仁辛の西の歴、雜行を捨てて本願に帰す。 龍樹・天親（一心） 曇鸞・道綽・善導（要弘二門／念觀両宗）・源信・源空
久しく 万行諸善の仮門を出でて、 現在形 永く 双樹林下の往生を離る。 現在形	（要門） ① 永・久 の過去からお育てに遇ってきた。 ② 現在形 ただ今、時を超えた願海（無量寿・無辺）に帰入して、今すでに広大無辺の仏恩に包まれている今仏の入滅を見る化土往生 回変 諸行不堪 「要門釋」 勸誠 187 行が変わる 『要集』念仏証拠門 第十八願は「別願中の別願」『觀經』定散諸機は「極重惡人唯称弥陀」

	心が変わる 濁世の道俗、よく自ら己が能を思量せよ
善本	(真門) 200 善本は如来の嘉名なり。 此の嘉名は万行円備せり。 (あらゆる善をまどかにそなえている) 一切善法の本なり。 (すべての善い行いの本である) 徳本は如来の徳号なり。 此の徳号は一声称念するに 至徳成満し (この上ない徳がその身に満ちて) 衆過皆転ず。 (あらゆる罪がみな功德に転じる) 十方三世の徳号の本なり (過去・現在・未来のすべての仏がたにそなわる徳の名の本である) 真実門の一字褒貶 200 褒 教頓 貶 機漸 難思議往生の一字褒貶 一字褒 教頓 徳号によるがゆへに難思議往生とまふすなり 貶 機漸 疑惑するつみによりて難思議往生とはまふさず (『三経往生文類』592) 本願招喚の勅命を聞いている「今」 時間の中に生きる私に救いが届いている様子
真門に回入して、	
ひとへに難思議往生の心を発しき。	
しかるに、今ことに方便の真門を出でて、	
選択の願海に	「選択本願」第十八願に局する用語。(『末灯鈔』第一通参照) 55 「一乗海釋」 「海」といふは、久遠よりこのかた凡聖所修の (転善) 雑修・雑善の川水を転じ、 (転悪) 逆謗闡提・恒沙無明の海水を転じて、 (成真実) 本願大悲智慧真実・恒沙万徳の大宝海水と成る。 これを海のごとくに喩ふるなり。 同一鹹味 善をほこる心・悪を恐れる心が奪われる 不宿屍骸 自力無効
転入せり。	転捨 帰入 機法ともに自力を捨て他力に帰する
すみやかに難思議往生の心を離れて、難思議往生を遂げんと	「大経讃」(64) 至心・回向・欲生と

欲す。果遂の誓（第二十願）、まことに由あるかな。	十方衆生を方便し 名号の真門ひらきてぞ 不果遂者と願じける (55) 果遂の願によりてこそ 釈迦は善本・徳本を 『弥陀経』にあらはして 一乗の機をすすめける (56) 定散自力の称名は 果遂のちかひに帰してこそ 自力の心にて名号を称えたるおば ついに果たし遂げむと誓いたまふなり をしへざれども自然に 真如の門に転入する 法身のさとりを開く身と 移り入るとまふすなり
---------------------------------	--

2項 所得を伝ふることを明かす

爰に 久しく願海に入りて、深く仏恩を知れり。至徳を報謝せんがために、 真宗の簡要を撫うて、 恒常に 不可思議の徳海を称念す。 いよいよこれを喜愛し、ことにこれを頂戴するなり。	爰 あひがたきものにあえたよろこび（空間的） 「総序」ここに愚禿釈の親鸞、慶ばしいかな、西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師釈に、遇ひがたくしていま遇ふことを得たり、聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。 「別序」ここに愚禿釈の親鸞、諸仏如来の真説に信順して、論家・釈家の宗義を披閲す。広く三経の光沢を蒙りて、ことに一心の華文を開く。 久 あひがたきものにあえたよろこび（時間的） 本典成立の契機 「撫う」文類の意 『本典』255後跋 真宗の詮を鈔し、浄土の要を撫ふ。 『一多』161 恒 おりにしたがふて、ときどき 常 ひまなかれ・つねにしてたへず、ところとしてへだてず 称名 頂戴 他に二カ所 ・一乗海釋59 こちらが親しい
---	---

「福智藏（18）を円満し、方便藏（19/20）を開顕せしむ。まことに奉持すべし、ことに頂戴すべきなり。」
 ・「証文類」やぐい151
 「ここをもつて論主（天親）は広大無碍の一心を宣布して、あまねく雑染堪忍の群萌を開化す。宗師（曇鸞）は大悲往還の回向を顕示して、ねんごろに他利利他の深義を弘宣したまへり。仰いで奉持すべし、ことに頂戴すべしと。」

「頂」「戴」「頂礼」「頂三昧」の意味

（諸橋大漢和辞典）

「頂」 ①頭のいただき。

④いただく。かしらに物を戴く。大切にする。

〈邦語〉いただく。①もらふ・たべる・買い受ける等の謙譲語。

「戴」 ①のる。

②のせる。㊦うける。承。㊦かしらにのせる。いただく。

「頂戴」 ①頭にいただく。おし戴く。又、敬礼の意。 ③もらひ受けることの敬語。拝受。拝領。

（望月仏教大辞典）

「頂礼」

頭頂を対者の足に著けて礼をなす。頭頂礼敬。頭頂礼足。頭面礼足。頭面作礼。頭面礼。

「頂三昧（金剛喩定）」

金剛に喩ふべき定。金剛三昧。金剛心。頂三昧。

定の堅固不動にして能く一切の煩惱を断破するを、金剛の堅固にして他の諸物を碎破するに喩えたるもの。

広く分別すれば金剛の名は諸位に通ずる。別して言えば、小乗には非想地の最後の一治、大乘には第十地の最後窮終の一念。最後身の菩提樹下において衆相離垢障三昧を得る。

④ 宗祖における三願転入の事実の有無

三願転入は本人の経験である

『本典』 三願転入の文

主語 是をもつて愚禿釈の鸞、(中略)

廻入 善本徳本の真門に回入して、ひとへに難思往生の心を発しき。

転入 転入せり

爰に久しく願海に入りて、深く仏恩を知れり。

自身の経験を表す過去形 「き」

完了形 「せり」「れり」

二十九歳に直入した説

『本典』後序の文²⁵⁴

愚禿釈の鸞、建仁辛酉の暦、雑行を棄てて本願に帰す。

『御伝鈔』第二段 吉水入室

たちどころに他力摂生の旨趣を受得し、あくまで凡夫直入の真心を決定しましたしけり。

四十二歳 信心がゆらいでいた説

『恵信尼文書』第五通 (註釈版は三通) 1036

よくよく案じてみれば、この十七八年がそのかみ、げにげにしく三部経を千部よみて、すきう利益のためにとてよみはじめてありしを、これはなにごとぞ、〈自信教人信難中転更難〉(礼讃)とて、みづから信じ、人を教へて信ぜしむること、まことの仏恩を報ひたてまつるものと信じながら、名号のほかにはなにごとの不足にて、かならず経をよまんとするやと、思ひかへしてよまざりしことの、さればなほもすこし残るところのありけるや。人の執心、自力のしんは、よくよく思慮あるべしとおもひなしてのちは、経よむことはとどまりぬ。

〈令和七年決議〉

三部経千部読誦の問題も、「人のしうしん、じりきのしんは、よくよくしりよあるべしとおもひなしてのちは、きやうよむことはとどまりぬ」と記されているように、他力の信心が確立しておればこそ、反ってその誤りに気づき、呪術的救済法にたようとした自身に対して、深く慚愧されたと見るべきである。

⑤ 三願転入釋の所顯

宗祖が「頂戴」された「選択の願海」

- ・ 真だけじゃなく仮（おてだて）も含む
- ・ 万人を引き受け育てる
- ・ 万人が頂戴すべきもの
- ・ 三願真仮の法義が確立した上で、獲信からお育てを振り返った。

※間違いやお気づきの点があればお知らせ下さい。

〒五九九―八一二五 大阪府堺市東区西野521旭照寺 山上正尊 senjakuhongan@gmail.com